

令和4年度第2回 八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館運営協議会

日 時 令和5年2月9日（水）午後1時30分～3時00分
場 所 八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館 研修室
出席委員 岡村道雄委員 高田和徳委員 山下治子委員 鈴木規夫委員
石川宏之委員（オンライン）
事務局 工藤館長 松橋副館長 渡参事 小久保副参事

次第

1. 開会
2. 会議

(1)令和5年度事業計画について

岡村会長：ありがとうございます。ただいまの説明に質問ご意見等ありますか。

山下委員：質問ですけれども、縄文カレーは昨年12月をもって終了とありますけれども、おもな理由は何ですか。前は匂いが展示室の近くまでくるというクレームがあったと聞きましたけれども、ほかにもいろんな理由があるのですか。

事務局：カフェスタッフのほうから、メンバーが不足してきていてカレーを仕込んで提供することが難しくなってきたり、縄文遺跡群の世界遺産登録の効果もあって、カフェショップが非常に賑わっていたこともありまして、かなり負担がかかった時期があったことも重なって、またスタッフが減ってきたこともあって提供が難しいというお話をいただきました。カフェスタッフのほうで話し合いを重ねて、12月いっぱいということで決めさせていただきました。

山下委員：カレーを作るのに、仕込むのに時間がかかるということですか。

事務局：はい。

高田委員：わかりました。新しい、なにかそれに代わるものを考えているということなのですか。

事務局：カフェスタッフの方のなかで意欲的に新メニューを提案されている方もいますし、またこれかわ考古学クラブのメンバーのなかでも縄文のメニューを提案してくれたりしていますので、これからいろいろ話し合っ、可能な範囲でやっていけたらとは思っております。

高田委員：関連してちょっとよいですか。何人くらいでやっているのですかね、それはボランティアかなんかの団体ですよ。全体として何人くらいで、ローター

ションでやっているとか、そういうふうなのがどんどんもう手が回らなくなってきたっていう感じなのですか。

事務局：おっしゃるとおりで、もう立ち仕事に一日耐えられないとか、そういう理由からもう引退しますという方がここ数年で何人も出てきている状況でして、メインのスタッフの方は10名ぐらいで交代しながらやってもらっている状況です。

高田委員：やっぱり、年配の人が多いですか。

事務局：基本的には60代以上の皆様です。縄文館開館前からいる方もいらっしゃるのですが、そのまま11年経っているので高齢化が著しい状況となっています。

高田委員：若手の人が入ってくるということはやっぱり難しいのですかね。そういう会に。

事務局：基本的にはボランティアなので、なかなか若い方は難しいかと思います。

高田委員：結構、でも収益はあるのでしょうか。食べ物を出したりなんかしているのだから。ほとんどあまりないのですか収益は。

事務局：雇用はしていませんので、報酬を出していない状況です。

高田委員：まったくのタダですか。

事務局：いえ、交通費程度のお支払いはできています。

高田委員：なるほどね。

山下委員：でもあれですよ。ショップと売上げとカフェの売上げで原価はこれくらいだ、とかそういうデータは出しているのですか。

事務局：八戸縄文保存協会の特別会計のなかで収支精算は行っている状況です。ただ、かなり原価が高いというか、いい素材で安く出しているの、儲けは重視していなくて、喜んでほしいというボランティアの気持ちでいろんなものやってもらっているような状況です。

高田委員：グッズなんかもあれは仕入れているのでしょうか。どこから仕入れてそれを販売、頒布しているわけだけど、それもやっぱりほとんど原価に近いのですか。

事務局：一応、市内は2割、市外は3割というふうに、委託の場合はそういった掛け率でやらせていただいています、10人を雇用できるような売上げには至らない状況です。

高田委員：年間でどれくらい収益があるかというのは、そういうのはわかんないですか。

事務局：のちほどお知らせするというのでよろしいですか。

高田委員：おおよそどれくらいとかっていうので。

山下委員：運営のしかたで極端にいうと、ある美術館で、地方にある美術館は周りに飲食店があるってことも踏まえてなんですけど、いろんな飲み物はそれなりにかっこいい自販機にして、ここで休んでもらうっていうような素敵な椅子にするとかですね。そういうのにして人件費を抑えるっていうような、極端

に言うともそういうことも考えられるのかなとは。実際にいま人気なものはなんなのか、あと軽食はほんとに必要なのかとか、軽食であればどういうものがあるのかとか。そういうものでもみなさんと考えていくとカレーはなくなったとしても、それに代わるような名物が出てくるといいなと思います。

高田委員：すこしやっぱり収益が出るように、やったほうが。もちろんそれが目的で来る人ではないのだろうけども、ボランティアの人たちは。ただ、ある程度それで回っていてそれによってなにか楽しみみたいなことでもできれば。

実はうちのほうで友の会っていう会があるのですよ。それは発掘にずっと昔にやったりしたけども、だいたい70歳以上ぐらいかな今は、90歳ぐらいの人もいますのだけども。でもずっとそれが続いていて、その人たちはもうあまり体を使ったりするっていうのはできなくなったので、最近は藍染めをやっているのですよ。藍染めを自分たちでやって集中的にたくさん作って、それを実は博物館のショップで売っているのだけども、それがすごい人気で。安いから余計人気で結構売れるのですよ。私ももうちょっと高くしてもいいのじゃないかっていうのだけど、いやいや別に高くしなくてもいいよ、ってやっているのだけども。結構それで収益があるから、みんなで温泉行ったりとか食べ物を食べたりして、それが楽しみでみんな集まってくるのですよ、月に1回ぐらいね。だからすこしなにか、たしかにボランティアでやってもらうっていうのはありがたいことなのだけども、長続きするために自分たちも楽しめるような、そういうふうなことがあったほうがあればいいのかなという気がしますけどね。

鈴木委員：是川小学校さんと総合的な学習の関係で進めていくということだったのですけども。もしそれが軌道に乗るといふか目星が付くようであれば、それをこういうふうにやっていますよというのを情報発信していければ、近くに中居林小学校も岡南小学校もありますので、そういうようなところもいまコロナでなかなか地域に出ていけなくなっているの、発展的にほかのところも是川縄文について学習していける機会になるのかなと思いましたので、これからの進みかた次第だと思うのですが、もしいい感じでしたら情報発信していただければと思います、よろしくお願いします。

事務局：はい。お話をいただいた段階で、4学年40コマって言われまして、どれぐらい学芸員がそこに関わるのか。これから相談しながら、全部は無理だと思うので、いろいろ相談しながらいいモデルづくりができればと思います。ありがとうございます。

岡村会長：やっぱりちょっと過重すぎるよね。40時間って授業で40コマってことでしょう。大変だよ。小学校だったら45分か。中学校も45分か。

鈴木委員：中学校は50分で、小学校は45分です。

岡村会長：東京で総合の時間に、区民ということでちらっと縄文の話をしにいて3年

間やったのだけど、やっぱり大変だったですね。ほんと、行くだけでも大変だった。そういう負担は物理的にかなり厳しいなという印象を持ちますね。

そこで思いつきなのですけど、それを受けとめるのは全部学芸員でなくてもいいんじゃないかなと、そういうのはだめですかね。例えばここでボランティアの解説している人だとか、むしろ俺みたいな研究馬鹿が説明するのと違う、そういう挫折感をものすごく感じたのですよ、区の総合の時間に話をしにいった。脇で聞いていた中学校の先生が、俺が知っていることで、子どもたちはたぶん遺跡とか遺物とかって言葉すらわかりませんよと言われて、もう愕然としたことがあるのだけど。まあそんなことは学芸員の人達は分かっていると思うのだけど、むしろ専門性は必ずしも問わなくて、ここで普段解説している人達もいるわけでしょう。解説員も含めて、ここに来ている人達がいるでしょう、サポーターさんたちですか。そういう人達にもそういう門戸を広げてあげると、むしろ喜んで勉強して説明してくれるのじゃないかな。そんなこともつながりとして考えられませんか？

事務局：はい。出前講座で土器づくりですとか、伺うときはボランティアさんと一緒にいきますので、相談しながらいろいろ協力してやりたいと考えています。

岡村会長：だいたい40コマもやるとするなら、メニューを作らなければいけないよね。

事務局：はい。先生方のほうで学年ごとにテーマを衣食住とかわけて。それぞれでやりたいってするのでそれはまた我々にとっても大変だと思っています。そのほか、是川小学校さんは土器づくりを各学年で必ず全生徒が参加するので、それもやりつつ総合もやるとのことなので、壮大な計画を持ち込まれたところでございます。

岡村会長：学校はそういうことを求めるっていうのは、動機はなんですか。

鈴木委員：やっぱり、ちょうど自分たちの住んでいる地域に世界遺産があるということ、意外と子どもたちが意識していないっていうか漠然としてしか捉えてないので、きっと自分たちの住んでいるところに、世界に誇れるこういうふうなものがあるのだよっていうのを子どもたちにわかってもらって、地域の誇りとして八戸市民の誇りとして勉強して行ってほしいな、っていうふうな思いがすごく強いのだと思います。そういうふうなことで今、計画が始まっているのだと思います。

岡村会長：高田さんのところも、そういう実践はされている？

高田委員：集中的にやっているのは地元の愛護少年団。もうずっと毎年テーマを決めて、基本的には子どもたちは自分たちで調べています。それにアドバイスとか、まず最初に来て学芸員からいろんなことを聴いてどうやったら良いかみたいなこととか、あとは自分たちで調べてそれを発表するっていう感じです。いまおっしゃったように、確かにこういうふうなかたちで関わると、本当に実はたいへんなのですよ。実際行って説明するのも、だいたい準備するのに

すごい時間がかかるし。同じようなかたちで仕事している人だと、言葉をそのまましゃべっても通じるしいのだけども、それから始まりますからね。ひとつひとつ説明することから。

山下委員：実は滋賀県で、県で次世代文化芸術センターっていうのを作っていて、そこは県内のミュージアムと学校の連携を、県の予算をつけてそのなかから講師代、講師とかボランティアさんも含めて、予算をつけてそういうセンターっていうのを作ってやってきているのですよね。

そこでたとえば陶芸の森とかミュージアムとかあるのですが、その学芸員さんが当日は講師になるのですが、その前の段階で、センターのスタッフがその学校とかに行き、こういう内容でいきますけども大丈夫ですか。もしわからないとか不登校とか、あとは授業についていけない子とか学校でいろんな課題がある。それを一斉にこうですよって講師の人が来てやっちゃうとまた来なくなっちゃうっていうか、余計孤立してしまうとかそういう問題もあるようなのです。ですからたとえば、学芸員さんと学校の先生だけでやるのじゃなくて、もう一つサポーターって、それこそさっきのボランティアさんじゃないですけど、そういう人を噛ませて入れていくと、授業の内容についてここまでできるとか、ここまで教師の方でお願いしますとか、そういう組み立てを、最初はあれかもしれないけど、ゆくゆくは綿密にやらないと、もういいです、なんてなっちゃったりするのかなと思うので、そこはサポーターの人からちょっと学校のこと知っている方を入れていくと、よりスムーズにいくのじゃないかなと思います。

高田委員：それでずっと振り返ってみると、どうしても最初は学校というところで、こっちで教えよう教えようみたいな感じになっちゃうのですよ。つまり学校の授業と同じようなかたちで。そうするとこっちで全部準備しておいて、遺跡のこととか縄文のこと教えるので、ずっとこうなってしまうようなかたちだったのだけども。途中からうちのほうではむしろ生徒たちが自分たちでテーマを決めて、こういうことを知りたいってやって、どういうふうにするかの手順とかをそこだけを教えて、あとは自分たちが調べるようにしたのですよ。そうするとやっぱりすごく楽です。何回も何回も自分たちで調べたことを確認のために博物館に来て、学芸員の人とあれがどうだとかこうだとかっていう確認をして、またこういうふうにしたらいよいよってことになったら、また今度はそっちを調べるというふうなことで。やっぱりそういう方向のほうで、どうしても学校という教えるっていうみたいなかたちで、授業みたいなかたちでやっちゃうのだけども、それはやっぱり大変だったなって気がしますね。そういう意味では、子どもたちが自主的に今年度はこういうこと

やりたいとか、たとえばうちでしたら土屋根の角度がどうだとか何度だとか、
どうのこうのやるとか調べるとかみたいな感じで、自分たちで測ったり調べ
てやったりもしたりするので、そういう実用的なことになるとたしかに楽で
すよね、博物館としては。

岡村会長：楽ってということよりも、子どもたちの主体性と、今、私は隣の学区の小学校
の授業をときどき見に行くのですが、子どもたちで議論させているのだよ
ね。教壇の上から、上から目線で教えるのじゃなくて、子どもたちのなか
に入って、子どもたちでグループを作ったり、あるいはできる子とできない子
がちゃんとタッグを組んでいて教え合っている。子ども同士が自分たちで議
論しながら授業を成立させている。

ああいうのを見ていると学校教育は民主的になったのだなとわたしは感動
していますけどね。それと同じように、やっぱりいま高田さんが言ったみたい
に自分たちが主体性を持って自分たちが調べていく。そうすると主体者にな
って物事を明らかにしていくという、自分たちで明らかにしていくという面
白さが分かるじゃないですか。それはやっぱり科学する心というか。大事なこ
とだと思うので、そういういろんな施策を考えたりね。

石川委員：先ほどのショップの話とか今回の小学校対応の講師の役。共通することとし
ては、ボランティアっていうのが多分持続可能じゃないので、ちゃんとそれ
を有償で授業を委託して、人件費とかをいろいろマネジメントできるよう
な、そういう人材を育成することが多分持続可能なのかなと思いました。

例えば人材のデータバンクみたいな人脈づくりというのがまず必要なのか
など。そのために八戸市の小学校、中学校、高校などの退職した先生方の人脈
があれば、まずそういう方とコネクションを持って。あと一番これからの授業
で大切なのは、人材を養成する講座をつくって、そういう人達が NPO 法人み
たいなのを作って、小学校から授業を委託して、ちゃんと対価をもらって教え
るっていうそういうふうなやりかたじゃないと多分、いわゆる講座というの
を学芸員がやるというのは到底無理で。

今なぜこういう話をしたかという、ジオパークでもいろいろ活動拠点施
設としてミュージアムが、伊豆半島とかそういう拠点施設が作られていくの
ですけど、そこにジオガイド協会っていう協会の専任のスタッフがいて、そ
ういう人達がミュージアムの案内とかあとは出前講座とか、そういったものを
市の教育委員会とかから事業として委託を受けてそれで教えにしている、

と聞くので、八戸市にそういう人材がいるのかどうかというのと、もし人材がいなければそういう種をつくって、養成講座っていうのを作って、リタイアした先生がたに話してもらって、ちゃんと市も講座に対して対価を払うとか。そういう経営的な話も含めて一步踏み込まないと、たぶん持続的じゃないのかなとちょっと思いました。そういうのってほかに世界遺産のエリアでの博物館、岩手県とか秋田県とか北海道の事例っていうのは、なにかあるのでしょうか。

事務局：ボランティアの有償化につきましては、これまでもさまざまな議論がありまして、縄文遺跡群のなかでは、有償でやっているところはまだないと思います。

石川委員：ないのですか。

事務局：はい。そういう人材バンクのような組織も、私が知る限りではないです。通訳案内士の方々は有償でガイドすることをやっていますけども、そういう取り組みはなくて。さらに、縄文是川ボランティアのみなさんは、有償化を望まない方が多くて、別団体を立ち上げるとなると、空中分解してしまうのかなということも考えます。

石川委員：先程のショップの話じゃないですけど、皆さん多分11年経って当時はまだ10歳若かったと思うのですが、その人たちが高齢化してきて次の若いっていうか、次の中高年の方が入ってこられないっていうのは、基本的にはやっぱり有職者は多分当然入ってこられないのだと思うのですよね。年金で暮らしてボランティアっていうふうな方が高齢化してくると、先程も言った、もう立っていることもできないっていう、そこのジレンマをどうするのかっていうような所が一番の課題かなと。あと全てボランティアがいいっていうわけではなくって、ちょっと次元は違うのですが、ジオパークの場合はちゃんといわゆる対価をもらってクオリティーをちゃんと高めて満足をいただける。その満足度を高めるっていうのがすごく大事だ。その持続的っていう話もなんですけど、ここら辺のその今の既存の団体はそのボランティアっていう所のポリシーっていうのはもちろん変えなくてもいいけども、この立ち上げっていうとき、次の段階っていう所でどう仕掛けるかっていう所なのかもしれないですね。そのため新たなこの人材育成っていうのはやっぱり必要になってくるのかなとはちょっと思うのですが。ちょっとこれは僕の個人的な感想ですけど、一意見として発言させていただきました。

岡村会長：はい、ありがとうございます。

高田委員：うちでも前から有償にしたほうがいいのじゃないかとか、ずっと前からあったんですけど、実はいま事務局が言ったように、うちもボランティアやっている人たちが実は拒否されたのですよ。報酬みたいなかたちで貰ってやるっていうのはちょっとそこまではできない。それほどきちっとした案内ができると思わないので、ということで拒否された。

うちのほうでは、実はそういうちょっと曖昧な形って言ったらかわいけど、ひとつは交通費ですね。交通費はきちっと払うことにしてずっと前からちゃんと払っているし、そのほかに一日来たらいくらっていう昼食代みたいな形でそれをやって、一日いくらってことで全部やっているのですよ。

最近はやっぱり人がどんどん減ってくるし、これから継続していくためにもちよっとあれなのでということで、それをボランティアの人から言われたのじゃなくて博物館のほうから金額を上げたのですよ、一日の経費みたいなやつとそれから交通費もかなり思いっきり金額を上げて、そういうかたちであれば拒否されないというか、やりかたもあるかなと思いますよ。

岡村会長：はい、わかりました。確かにいろいろ議論の余地はあるとは思いますが、やっぱり縄文的心でみんながやっぱり心でサポートしようと思っているっていう、そういう実態がよくわかる感じがしますね。

私はぜひみんな集まってきて、そこで何か対価を得るとかそういうことじゃなくて、みんなで会って縄文のことを語ったり、自分の家のことを語ったり地域のことを語ったり、そういうグループであったり、そういう中で余力の中で開発していくとか、それも楽しみだと思えるのだよね。それになにかきちっとした日当みたいなのを与えられると、いやそんなことでは俺たちはやっているのじゃないよって、それは当然言うだろうね。俺だったらいうけどな。そういうのは本当の意味ではボランティアなんじゃないですかね。言っていることはよく分かるのだけど、意見上はそうだってことですね。その辺も相談しながらやっているのだから、試行錯誤しながらやってきているわけですよ。それからその解説する人たちの教育。それもちゃんとやっているのだよね。

事務局：はい。

岡村会長：わたしは現状でいいような気がしますけど、なんといっても40コマだっのがちょっとすごいよな。それはなんとか工夫して欲しいなと。それも縄文的心でできるだけシェアすると分担する。それぞれの場面でそれぞれのやりが

い、主体性みたいなものを発揮させてみんなで楽しもうと。みんなで平和になると。そうしてください。

事務局：はい。

岡村会長：それでは他に別の課題とかで今の（1）で何かありますでしょうか。情報発信の話ですけど、いつもここは一つ大きな業務ですから、展示業務とかその他の情報発信もあると思うのですが、よく話に出るのは今本当の情報発信の手段というかツールがどんどん進化しちゃって私は全然ついていけないんですけど。

例えば新聞は読まない、今の子どもたちね、大人も含めて新聞は読まない。それから最近ちょっと驚愕したのですが、小学生の半分はテレビを1時間も見ない。そう言われてみればうちの孫もテレビを見てないな。テレビを使ってもゲームをやっているだけで、そういうような実態。この辺は、学校なんかはどう捉えてられるかというのと、この間の情報発信のスタイルはホームページがどうのこうのとかよくそんな話になるけど、それから映像なんかでユーチューブだとかヴァーチャルで現場に立ったらとか、いろいろそういう情報発信ツールなんかのことも含めていろいろ検討してきているわけだけど、なんか大きく状況が変わってきているのじゃないかなという、それが一番びっくりしたのはテレビなのですが、その辺どうですかね、今後に向けて。何か提案というか、学校側はなんかどう考えているのかなとか。学校もIT化すごく進んでいて個人のタブレットみんな持ってとか、変わっているよね。

事務局：子どもが今やっていることは、SNSは特にやっていなくて、ホームページに集中してホームページだけで発信するように、インターネットはそういう使い方をしています。その他、やはりそうは言っても子どもたち以外の人口のほうが多いですから、紙媒体ですとかテレビ・ラジオで是川縄文館が取り上げられますと、確実に来館者が増えますので、取材とかは決して断らずに最大限の努力で取材を受けたりとか。そういうふうメディア対応をしながらフリーペーパーとか、特にファンを増やせそうなところに情報提供をしてというように心がけています。

次年度は予算要求段階なのですが、縄文遺跡群のPRとしまして新幹線社内誌トランヴェールとか、それから東京駅と上野駅の新幹線乗り換え口のデジタル広告のサイネージに広告を出すように予算要求をしております、東北に足を運ぶ方の選択肢になるように是川を、御所野遺跡が先にやっておられるのですが我々もやりたいと思っています。子どもの皆さんには体験学習で

すとか考古学クラブですとか、そういう特別な体験が縄文遺跡群に行くところよということで広めていきたいなど考えています。

鈴木委員：はい。この間デーリー東北に2面でバンと載っていましたよね。紙面を2面使って是川の遺跡はすごくインパクトが強かった。それとテレビでまたコマーシャルが入りましたよね。

事務局：おそらく、今美術館で開催している写真展のコマーシャルです。

鈴木委員：それを見ていて、やはり行ってみようかなというふうなことを言っている者が身近な者にいるので、それはそれなりに特に新聞はすごいインパクトが強くて良かったなと思いました。以上です。

岡村会長：何だか、年齢層もあるのだよね。子どもは新聞を読まない。本当に顕著ですね。発行部数なんかも完全に諦めているし。要するに今、私は今後に対する構えみたいなものを、どこまで展望するのかなというあたりは、現代文化に対応して山下さんとか色々考えていないですか。

山下委員：少し外れるかもしれませんが、私がちょうど大学で教えに行ったら、八戸出身の子がいてすごく熱心なのですよ。是川縄文館にも何回か来たと言っていて。それで成人式の時にタオルですか、いのるんと書いてあった、二十歳の時にそれをもらったのです。写真を見せてくれたのですけれど。地道にやっていくって言うことがやっぱり、例えば学校の授業でやったとしても、やっぱりアートが好きな人とか音楽が好きな人とかいっぱいいる訳なのだけれど、歴史と文化が好きとかって言うのはあんまり目立たないかもしれないですけど、やっぱり蓄積していくことがすごく他の人に伝える術にはなっていくので。

あと給食の器ですよ。あれなんてやっている所が無いのじゃないかと思うのですけれど、給食の器のことで子供たちにヒント、これが何だか分かる？とか、こうなって実はねっていうのはすごく入り口がいろいろあるので、小学校の給食で食べている器の中に、そういう縄文文化が入っているなんていうのはとても素敵なことなので。それは大きくなってからみんなに自慢できることなのじゃないかなと思いますね。ですので、SNSとかそういうこともあるのだけれど、やっぱり対面でお話を聞いたり実体験していくっていうことの大切さっていうのは、地元ならではのできることなのじゃないかなと思います。

岡村会長：よろしいですかね。

石川委員：世界遺産の保存と活用についてということで、こちら静岡から来ると一番すぐ分かりやすいのは、やっぱりテレビのマスメディアのことで、TBSとかNHK番組で北海道・北東北の縄文遺跡群の特番とかやると、それこそ僕はテレビで高田先生が2、3回インタビューされているのを見た覚えがあるのですが。高田先生のところで、いわゆる世界遺産になる前からこういうシンポジウムを本にしたりとかして、こういう物があるから結構そういうメディアが飛びつきやすいとか、特に高田先生のところはどういうふうに工夫して上手くこういうマスメディアとかに接点を持ってPRされているのかなって、そういうのが結構改めてテレビで子どもたちが見るとハッと我に帰って、あっ、こんなのが自分の所に世界遺産があるのだという、そういうインパクトっていうのが強いのだと思うのですが、高田先生、そういうところをご助言いただければありがたいと思います。

高田委員：特に世界遺産に関して言えば、岩手県はうちしかありませんから。そうすると県で、こういうのは結構お金を使ったりしてやるのは県が中心になってやるのですが。そうすると今度は御所野しかありませんから、幸いそういうメディアに取り上げていただきやすいということはあるかなというふうに思います。

あともう1つ、遺跡そのものが少しは形として見られるような今状態になっているので、そういうのがマスメディアのほうにしては、そういうのを流しやすいとか所謂、縄文のイメージを流すにはちょうどいいとか、そういうふうなことがあるのかなという気はしますね。

ただでも実際現場の方でやっている取材とか何か来ると、まあ実は大変なのです、本当はね。ほんのちょっと一瞬流すだけなのだけれども、それ撮影の時間とか、その準備とか、結構いろんな方がいますのでそういう業界の方もですね。それはそれで取り上げていただけるだけありがたいなと思って、今は対応しています。もっともっと、だからその是川の魅力がこんなに素晴らしいのがいっぱいあるっていうのが、何らかの形で1回出ればそういうふうなことで、またどんどん飛びついていくのじゃないですかね。

石川委員：ありがとうございます。

岡村会長：はい、他に。最近それで感じるのは、他の世界遺産が世界遺産になるとツーリズムがすごく起こって、新聞の広告なんかにも世界遺産の旅とか、そういうレベルで見えていくと今度の縄文はコロナのせいもあると思うのだけど、そ

ういう観光のやつはほとんど目につかないね。あれが気になるね、やっぱり。

山下委員：でもたくさんツアーは来ている。

高田委員：いや。

事務局：首都圏分からのということでしょうか。

岡村会長：やっぱり大手がついてないよね。それは話を聞くね。細かい会社は動いていると。要するに大手があんまり触手を延ばさなかったから。いや分かんないよ。その実態は分かんないけど、そういう声は聞くし、私が読んでいる新聞には出てこないと思って、それが今までの世界遺産に対する対応とちょっと違うなという感じがするのだよね。そこをちょっとどうしたのかなって、1回考えてみた方がいいよとか気がしないでもない。高田さんの所なんかも大賑わいだって聞いているけど、大賑わいで人がいっぱい来て大変だって。

高田委員：大賑わいでもないですけどね、ここと同じで。コロナのこともあるので。前よりは来ていますけどね。

岡村会長：それはコロナが収まってくると、コロナ後をどう対応していくかっているのを考えていかないとせっかくの盛り上がりの所をコロナで、コロナだけじゃないと思うのだけど、なっているでしょう。それがコロナ前に戻っている世の中じゃないですか。そういった時の対応をまた緩めないで、何かせっかくの世界遺産をアピールできる。

高田委員：この間、出版社の人といろいろ話す機会があったのですが、縄文は長続きしそうだという話はしていましたね。その前の百舌鳥とか、ああいうのは確か一気にグリーンといったけども、あつという間にするする萎んでしまったので。

岡村会長：それは出版という意味ですか。

高田委員：まあ、本とか皆さんの関心があるという。

岡村会長：縄文ブームは去っていませんよ。むしろもっともっと行きそうなのだけど、俺が主張するのはそれに応えるような考えをちゃんと作ってもらって、できたらブームをどうやったら維持するかっていうことを真剣に考えてほしいということもさっきも言ったのですけどね。

その中の1つでツーリズムが起こって、あまりないというのも心配だし。それから回っていった時にそれぞれの場所はブームに期待感の高まり感がブームだと思うのですが、そういうのにどこまで応えられているのかなというのを考えて欲しいのだよね。

(2)自己点検について

岡村会長：はい。ということですが、よろしいですかね。

高田委員：この添付されている参考資料には無かったのですが、八戸市が進める文化芸術のプランということで文化のまちづくりプラン、その中でちょっと触れられていたのがやはり中間支援の大切さとか、あとは NPO との連携みたいなことが書いてあったのですが、でも実際にはそういう中間支援を行っている組織っていうものがあるのでしょうか。すみません。書かれていることは最もだと思ったのですが、それを実行するには机上の空論ではできないなみたいな感じがしたのですが、実際にはそういう市のまちづくりの方向性としてあるものの、本当にこんなことができそうなのですよっていうのがあるのでしょうか。

事務局：その取り組みがこれからスタートするお話で、キックオフイベントが今度の2月の下旬に始まるような段階でして、キックオフをしてその養成をして、そういう支援組織を作っていきたいというのが八戸市のまちづくり文化推進課の方で現在考えている事業になります。

高田委員：そうですか。

岡村会長：そこはどんなメンバーで議論していくの。課の中で話すの。

事務局：担当課長が集まった会議がありまして。

高田委員：いや、だからそこにどういうふうなメンバーが集まって、どういうふうに議論を重ねていくの、それで計画をつくっていくわけ。

事務局：計画はもうできあがっております。

高田委員：ああ、そう。どういう形で作ったのですか、このまちづくりプランというのは。すごいデータがあってびっくりしたのですが。すごいですよね、こういうのをよく作ったなと思うような感じです。網羅していますよね、八戸のことが。何年かかけてこういうのを作ったのですか。前に言っているのかもしれないけど。

事務局：いま八戸市の総合計画で第7次総合計画というのが4年度から始まっているのですが、それにぶらさがりながらまちづくりの文化と芸術に関する計画になっています。

もともとあったのですけれども、それを今度は文化の芸術活動振興とまちづくりということであらためて去年改訂作業をしまして、民間の方とか専門家の方とかに入っただいて、あとは担当課、関係する我々施設の担当の方とか集まりまして議論を重ねて、施設もやっぱりまちづくりしていくうえで

大切な役割があるということで、我々も去年から縄文館も入って議論を重ねて計画にまとめたというかたちになります。

このはちのへ文化のまちづくりプランですけれども、これを実行あるものにするために、プラットフォーム事業、はちのへアート広場というものを立ち上げたいということでは進んでいるところです。

その中身というのが、芸術活動の可能性や効果を大きく広げるため多様な主体が自主的に参加できる、対等な立場で緩やかに連携や協働ができる八戸ならではのプラットフォームづくりをするということで。参集の対象者が文化芸術活動者、個人とか団体、教育関係者、福祉関係者、高等教育機関または大学等です。それから地元の企業とか市民活動団体、あとは文化芸術活動に興味のある方とか公立の文化施設関係部署等を想定してやっているということです。これから動きが出てきますので今はまだ何も言えないのですけれども、計画を実行性のあるものにするためにそういう事業を立ち上げていく。これからということでございます。

高田委員：この文化創造推進課というのは、普段どういう仕事をしているのですか。文化関係のそういう部署の総まとめ取りまとめのようなことなのですか。

事務局：はい。教育委員会ではなくて市長部局のほうで。

高田委員：ああ。市長の方で。でもすごいですよね、こういうのをするなにか市長さんの方針から結構ありましたか。

事務局：はい。補足なのですが平成29年に国のほうで文化芸術振興基本法の改正がありました。改正にあたって努力義務が示されて、八戸市はそれに従ってこのように策定したということです。

高田委員：ああ。なるほど。

石川委員：すみません石川です。よろしいですか。まさに今度、令和5年4月1日に博物館法の一部改正をする中で、社会教育法に加えて文化芸術基本法の精神に基づくことを第1条で定めた、というのはまさに先取りで、こういうものを八戸市も動いているのだなというのは改めて感心をしました。ありがとうございます。

ひとつ、その次の3条のところで博物館事業に関することも書かれているのですが、先程の話とも関係してくるのですが、地域の多様な主体との連携協力というところが今度の改正の一つのポイントで、是川縄文館も民間団体とか、場合によっては八戸市には文化芸術事業財団みたいなのはあったの

でしたか。最近、先月静岡市も歴史博物館がようやく今頃、市の博物館ができたぐらいで。ただそこは、文化事業財団が指定管理者になっていま管理運営をしているようなところなのですけど。そういう母体がこの基本法の計画の中であると、先程の講座とか場合によってはミュージアムショップなんかも一部事業委託をすとか、そういうプラットフォームができてくるといいのかなとなんていいのかなとちょっと思ったのですけども。そういう動きっていうのはあるのか、そもそも事業財団があるのかどうかとか、もしわかれば教えてください。

事務局：事業財団についてはまだ無いです。ただプラットフォームづくりについては、今後進んでいくことになっています。

石川委員：はい。どうもありがとうございます。

岡村会長：はい、よろしいでしょうかね。他に何か、ご意見ありますでしょうか。ないようですので、よろしいですかね。

事務局：はい。そうしましたら、改訂案に従いまして、今回改訂部分は赤字の部分になりますが、赤字の部分を訂正したもので改訂ということで、ご意見として承りました。